

県北 どらくろあ

第66号 2021年9月1日（毎月1日発行）

岡田美知代覚書④

「自然の中の一軒家での

穏やかな晩年」

原博己



岡田美知代（52歳ごろ）
帰国する4年前の昭和12年ごろ
滞米中に撮影。
（府中市上下歴史文化資料館蔵）

押し入れの前に、藁の香の残る藁蒲団が置かれていた。滞米中再婚した夫、小太郎氏が使われていたのかもしれないが、二尺はあろうかと思われるベッドだった。麦藁のおいも新しかった。私が訪問したのは、小太郎氏が亡くなられて一年も経っていなかった。

二段の板棚があり、上の段に錆びついた鋸、斧、釘箱、金槌等の工具が置かれていた。これらは夫の小太郎氏が使われていたと思われる。滞米中、小太郎氏はカルフォルニアで果樹園を経営していたということだった。その農園でアルバイトで働く富豪の子息がいて、働く必要はないじゃないかと尋ねたら、「父のものは父のもの、僕のものではない」と答えたという。独立精神の旺盛なアメリカ人ら

しいエピソードである。

小太郎氏は、川北の家にいる前庭の、わずかな畑を耕して野菜を作ったり、林檎箱の底をくりぬいて伏せたような便器を工夫したりと、そのときに必要とした工具、農具だったのだろう。果樹園経営には遠く及ばないが、自分の生活は自分で工夫し、現実に即した暮らしだったのだろう。

美知代おばさんの部屋のすぐ裏の八畳間には、歴史を感じさせる囲炉裏がそのまま残されていた。奥の部屋には錆の臭い、囲炉裏のある部屋には湿った灰の臭い。しかし、障子で仕切られているだけの美知代おばさんの部屋には、不思議と臭いは入ってこなかった。囲炉裏のある部屋には天井がなく、真っ黒に煤けた太い木組みが見える。広い土間と箆敷きの空き部屋のあは家は風の通りがよく、自然換気に優れていたのだと思う。広い土間には何もなく、奥の裏戸を開けると五右衛門風呂と外便所が残っていた。ほとんど使われていなかった。

不便な面もあったが、住まいとしては快適だった。

テレビ、冷蔵庫、扇風機等はなく、小型のトランジスタラジオをよく聞かれていた。

周辺に人家はなく、すぐ近くに天満宮神社があり、参道の両側に杉の巨木が立ち並び、昼間も薄暗く荘厳な雰囲気を感じていた。美知代おばさん宅の神社よりの、なだらかな広い傾斜地には、リンドウ、笹百合、せんぶり、やぶれがさ、サクラソウ等の山野草の宝庫だった。

飲料水は神社の裏山沿いの小溝から懸樋（かけひ、木製の竹製の樋）が引かれ、北向きに設えた一坪ほどの炊事場の土間に清らかな水音を響かせていた。夏場は水枯れすることもあり、神社からほど近い山道沿いに、大きな薬缶二つを持って湧水を汲みに行くこともあった。後に、少し離れた近所の井戸から美知代おばさん宅まで、参道を横切るように百メートル余のパイプを埋め、水をモーターで汲み上げて、その蛇口が玄関脇に取り付けられた。

若葉の季節には、美知代おばさん宅の前庭で、山椒の芽、

柿の芽、榎（たら）の芽等、一緒に摘んでかき揚げにして食べた。美知代おばさんは、食べるのは少しだったが、何でも多く作るのが好きだった。

美知代おばさんは、「歩くのが下手なのよ」と自分で言われるくらい、滅多に外を出歩くことはなかった。夏は凄まじい蝉の鳴き声に「蝉声かしましく蚊多くしてよきところにあらず」と言っていた。ガラス戸を開けておくと、カミキリムシ、クワガタ等が飛び込んでくることもあった。何より嫌いだったのが、蛾と大きな山蟻だった。蛾を見るとおおきな悲鳴を上げた。山蟻を見つけると、憎らしそうに捻りつぶすこともあった。美知代おばさん宅も自然の一部だったのだ。

一九六八年一月十九日、美知代おばさんは八十三歳で波乱の生涯を閉じた。風花の舞う寒い日だった。

(次号へつづく)

【訂正とお詫び】

「岡田美知代覚書③」で、永代静雄が毎夕新聞社を退社したのは大正八年十一月と書きましたが、正しくは大正九年九月四日、永代静雄研究家の大西小生氏にご指摘をいただきました。

「岡田美知代覚書③」での岡田美知代の短編小説「一銭銅貨」は、「ホトトギス」ではなく「中央公論」（明治四十三年十二月号）、「女流作家小説拾篇」に掲載された作品。同月の「ホトトギス」には「岡沢の家」を発表。山梨県立大学名誉教授、吉川豊子先生のご指摘をいただきました。謹んで訂正するとともに、お詫びいたします。



「奴隷トム」
〈永代（岡田）美知代訳、
大正12年成文社発行〉

新刊紹介

「音楽への道」

(佐藤勉著、令和三年八月発行)

傘寿を迎えた元高校の音楽教師が書いた自分史。音楽と共に歩んだ人生が綴られていく。音楽を通しての恩師、仲間、教え子との交流。音楽という強固な「共通言語」があるので、すぐに打ち解けることができのさだろう。一生の友人、仲間である。自分が音楽音痴なので、楽器が演奏できる人には羨望してしまう。

著者は、昭和38年に庄原格致高校に赴任、書かれています。思い出は、同校の吹奏楽部の歴史の一部である。毎年恒例のクリスマスコンサートでは、初代指揮者の田森美治氏の後を受けて、二代目の指揮者に就任。



昭和61年に日彰館高校に転勤、同校の吹奏楽部の活動に尽力。平成9年に再び格致高校に赴任、平成13年に38年の教員生活を終える。退官してからも、ホルン奏者として、あるいは合唱団の一員として、音楽活動は継続。また、ご夫妻で始められた「さとやまオーブンガーデン」の活動は、多くの賛同者を得ている。

著者は「庄原よいとこ音頭」の共同作曲者の一人でもある。コロナ禍で今年の夏も庄原よいとこ祭りが中止になり、威勢のいい歌声や踊りが見られないのは残念だ。また、ご子息は伝説的なロックバンド「マリス・ミゼル」の創立メンバーのギタリスト。ピジュアル系のファッション「ゴスロリ」の教祖的存在、と書けば、頷く人も多いのではないか。海外にもファンが多い「庄原産」のビッグなアーティストである。

(文責：赤川仁洋)

小川洋子『妊娠カレンダー』

平穏な日常に育つ悪意

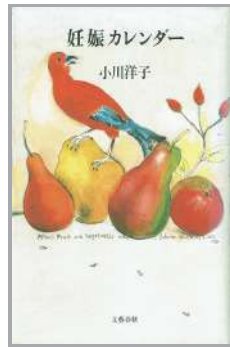
「姉がM病院に行った」と、始まりです。「十二月二十九日(月)」のことです。私の「どうだった？」の問いに姉(実姉)は「二ヶ月の半ば。ちょうど六週め」と答え、コートを脱ぎながら「ずんずん家の奥へ入っていった。特別な感慨があるようには見えなかった」のです。

小川洋子『妊娠カレンダー』は、文芸雑誌「文学界」(90年9月号)に載り芥川賞を受賞し、文藝春秋から他2作品とあわせて『妊娠カレンダー』として刊行されます。

「姉」夫婦と同居している「わたし」が、姉の妊娠の経過を細かく観察し、日記の体裁で進められます。姉妹は、早く両親を亡くし、そのまま両親の家で暮らしているのです。続く翌日、「十二月三十日(火) 六週十一日」には、姉夫婦は「二人とも、妊娠のことを話題にする気配はなかった」とあります。一方で、「今頃胎児はね、まぶたが上下に分かれて鼻の穴が貫通し、男子なら腹腔内にあった生殖器が下降してくるの」と、感情を排して克明に説明するのです。

7週目の「二月八日」、姉はつわりが始まり、ひどくなります。それは、「どうにかしてほしいの。すさまじい

また読んでみたい本⑥4 —— 青年たちに 音谷 健郎



【文藝春秋版の表紙】

古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思い、毎月1冊ずつ紹介しています。

第64回は、小川洋子『妊娠カレンダー』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

ツのジャムだけでは、姉はむさぼるように食べるのです。

こんな調子で出産までの選ばれた19ケ日の日記が、綴られます。

いよいよ最後の日記「八月十一日(火) 三十八週十一日」は、私が帰宅すると、義兄から「陣痛が始まった、

「えっ、この不穏さは何だ」と、読み終えた、読者である私の脳髓に、衝撃が走りました。振り返ってみれば、全く唐突でもないのです。不協和音の文章が伏線のように張ってあるのです。

作品では、姉に私のおいのなにもかもを否定されたころ、私は学校であった集会「地球汚染」に顔を出します。冊子に「危険な輸入食品」として「出荷まで毒薬に漬けられるグレープフルーツ」「防かび剤PWHは人間の染色体そのものを破壊する」とあったと記しているのです。

それだけではありません。スーパーでグレープフルーツを買うとき、私は必ず、「これはアメリカ産ですか」と確かめるのです。また、私の作るグレープフルーツのジャムを食べる姉を見ながら、「わたしは傷ついた染色体の形について、思いを巡らせる」のです。平穏さの陰で育つ悪意が描かれているのです。

前回の吉本ばなな『キッチン』に続いて、従来とは違った「日常」を見せつけられました。旧来の家族、家、世間とは全く違った世界が、静かに摘出されているのです。

今回は、目取真俊『水滴』を取り上げます。

おいが身体中に染み込んで、口も肺も胃もひっかき回されて」と泣きながらしゃべるほど。私の作る料理から、身の回り品まで、なにもかもが気に障るのです。そのために私は、庭にごさを敷いて、ひとり食事をします。ただ、私が作るグレープフルー

病院へ行きます」のメモがあります。M病院では、赤ん坊の泣き声が聞こえたような気がして「耳の奥が切なく」痛むのです。そして3階へ。最後の1行は、「わたしは、破壊された姉の赤ん坊に会うために、新生児室に向かつて歩き出した」とあります。

「草花の博物誌」

カリガネソウ 万葉集由来の優雅な花

カリガネとは「雁が音」、つまり、雁（鳥の仲間のガンのこと）の鳴き声という意味です。私の胸が痛むことである。（岩波書店刊 萬葉集(二) 日本古典文学大系による）

雁が音ということばが最初に使われたのは、穂積皇子の御歌（万葉集一五二三）のようで、「今朝の朝明（あさけ）雁が音聞きつ春日山黄葉（もみち）にけらしわが情（こころ）痛し」と、その歌の中に雁が音ということばがでています。

雁が音ということばは、雁の鳴き声という意味から、ガンのなかまを指すことばとなりましたが、今はガンの一種で、秋、マガンの群れに混じって、まれに日本へ渡ってくるガンの名前にカリガネが使われています。



万葉のむかし、奈良の都へは秋になると、マガンが渡ってきていて、その群れの中にはカリガネが混じっていたのかも知れませんが、マガンもカリガネも鳴き声はよく似ているよ

著者紹介…一九三一年、比婆郡（現・庄原市）比和町に生まれる。農学博士（九州大学）。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

うで、穂積皇子はみな雁（ガン）とされていたものと思われま

カリガネソウは秋、ガンたちが渡ってくるのを歓迎するかのように出します。長く伸びたおしべやめしべはガンの長い首を思わせま

開がった花びらは大空にひろげられたガンの翼を思わせます。このような花の形などからカリガネソウと名づけられました。

カリガネソウの花の形を帆に見たてて、帆掛草（ほかけぐさ）、帆立草（ほたてぐさ）と呼んだり、深い山の谷筋にはえているところから山鳥草（やまどりぐさ）と呼んだりするそう

秋の野に咲きたる花を指（および）折りかき数ふれば七種（ななくさ）の花（万葉集一五三七）

（万葉集一五三八）

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」（シンセイアート出版）から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

すが、私は雁が音草（かりがねそう）という名前が優雅でこの花にぴったりの名前だと思います。

カリガネソウの花は臭いが強く、その臭いを嫌う人もいますが、クマバチはよくこの花を訪れ、蜜を吸っています。クマバチにとって、あの臭いは蜜のありかを知らせる信号となっているのかも知れません。

むかしは庄原あたりにもガンが渡ってきていたことと思います。全く渡って来なくなったこの頃、カリガネソウはどんな思いで花を咲き続けているのでしょうか。

萩の花尾花葛花瞿麥（なでしこ）の花女郎花（おみなえし）藤袴（ふじばかま）朝貌（あさがほ）の花

これは万葉集巻八に収められている山上憶良（やまのうえのおくら）の「秋の花を詠む二首」です。憶良が最後にあげた朝貌の花は、今、私たちが見ているアサガオではなく、キキョウと考えられているので、秋の七草というと、憶良の歌がもたなつてハギ、ススキ（尾花）、クス、ナデシコ、オミナエシ、フジバカマ、キキョウをさすようになってい

ます。憶良がアサガオという花の名前をどうして知っていたのだろうか、そして、歌に詠んだアサガオの花をほんとうにキキョウと思っていたのか、ふしぎでなりません。それは奈良時代、キキョウのことはアリノヒフキと呼んでおり、出雲国などから奈良の都へ納めていた薬草を記録した延喜式（えんぎしき）という書物には桔梗と漢字で書いて、これをアリノヒフキと読ませています。

憶良の詠んだアサガオが今、私たちが夏の花として親しんでいるアサガオではないという理由は、アサガオは平安時代に入って牽牛子（けんこうし）の名前で唐（中国古代の王朝）から薬草として種子が伝えられ、日本では薬草として栽培が始まったから、憶良の「秋の花を詠む二首」が万葉集に収められた奈良時代には

まだアサガオが日本へ伝わっていなかったためと考えられていることによるものです。私は、憶良がアサガオという花の名前をどうして知っていたのだろうか、そして、歌に詠んだアサガオの花をほんとうにキキョウと思っていたのか、ふしぎでなりません。それは奈良時代、キキョウのことはアリノヒフキと呼んでおり、出雲国などから奈良の都へ納めていた薬草を記録した延喜式（えんぎしき）という書物には桔梗と漢字で書いて、これをアリノヒフキと読ませています。



このことから奈良時代には桔梗という漢字がすでに伝わっていて、中国で桔梗と呼んでいる薬草は日本ではアリノヒフキと呼んでいる植物だと当時の人は考えていたといえますから、アサガオの正体は何だろうと謎が深まるばかりです。でも、千三百年も大むかしのこと、謎は深い闇の彼方です。中国から伝わった桔梗はやがてキキョウに変化し、キキョウという和名が生れ、広まるにつれ、アリノヒフキという古式の呼び名は消えてしまいました。

「つれづれ歌談」15

松岡初枝

桔梗・刈萱・女郎花・葛・萩・撫子・藤袴、秋の七草の覚えかたを小さい頃教えてもらい、七・五調になっているので、春の七草とセットで覚えてしまい、自然に口ずさめます。刈萱は薄と同じ扱いで、か・る・が・や・です。

・はだすすき尾花逆草（さかぶ）
き黒木もち造れる室（むろ）は万代（よろずよ）までに

元正太上天皇

はだすすきと尾花を逆さに葺き、皮付きの木で造ったあずま屋、こんな数寄屋を作った王よ、栄えあれ。穂が出る前の薄、出た後の尾花を交互に葺く遊び心で太上天皇をもてなした長屋王。王と天正太上天皇は、どちらも天武天皇の



孫です。王は当代随一の文化人、かつ政治力を持つ実力者でした。・味酒（うまぎけ）三輪の祝（はふり）が山照らす秋の黄葉（もみじ）の散らまく惜しも

左大臣長屋王

味酒は三輪に掛かります。三輪のうまい酒や山を照らすもみじ、散るのは惜しいなあ……。長屋王は、太上天皇や文化人を自邸に招き、歌や漢詩に興ずる酒宴をよく開いて交流をしました。その様子が懐風藻に残っています。

この頃聖武天皇は、妃（みめ）

の光明子を皇后にしようと動きまします。しかし藤原氏の娘である光明子を皇后にすべきではないと、王は筋を通そうとします。聖武、藤原勢と反目する王。そんな時に聖武と光明の皇子が一歳足らずで死に、長屋王が呪った、との理由をこじつけて自死に追い込んだ藤原勢。一気に藤原一族の力が増大してゆきます。そして聖武、光明の皇女が立太子を経て、孝謙女帝になったのです。

もの言えは唇寒し秋の風。歴史が動く時には、大きな犠牲を伴うものなのです。

「みなさん、こんばんは。小早川彩香でございます」

廃校になった木製の校舎の壁にかけられた巨大スクリーンに、国民的大女優の笑顔が映し出された。八十年代になっても、清楚な美しさは変わっていない。かつての小学校の校庭に分散した人影から、拍手や歓声が起こった。

「本当に出演してくれるとは思わなかったよね」

パソコンのモニターを注視したまま、マスクをした水沼佳也子がつぶやくように言った。

「高山町はわたしの第二の故郷です。昭和十八年四月、まだ比婆郡高山村と呼ばれていたときに、母方の実家を頼って疎開してきました……」

彼女の自叙伝を読んでいたので、ダメモトで出演依頼の手紙を出した。コロナ禍で参加できないのは残念ですが、リモートの出演でよければ、との好意的な返信が届いた。

今回の計画の協力者である佳也子に相談すると「アタシが機材を調達してやるよ」とトントン拍子に話が進んだ。佳也子は市役所の商工観光課に勤務している。野外シアター用の機材一式と、それを操作する職員を一人、手配してくれた。

長引くコロナ禍で、毎年恒例の市花火大会が中止になった。今年の花火大会には特別な思い入れがあった。メッセージ花火に申し込んでいたのだ。打ち上げる花火の費用を負担すれば、自分のメッセージを放送してもらえる。

春先に母親のタケを八十四歳で亡くした。コロナ禍なので家族葬にした。東京在住の息子の慶彦も、かわ

式費用が五十万ばかり残っていた。それに自己資金の五十万を足して予算は百万円、花火業者との交渉も佳也子がやってくれた。

ガーガーと煩いのでガーコ、幼馴染だ。一つ年上のガーコがガキ大将で、おれの方が子分格だった。

「秋分の花火大会を開催します」小早川彩香の宣言で、連発の花火が満天の夜空に打ち上がった。歓声

肉の策でメッセージを多く集めたのだが、大女優の語りべの効果は絶大だった。感激して、すすり泣きする声も聞こえてきた。

「……新米で炊いた栗ご飯、楽しみにしてるからね」

打ち上げ花火の発射音が響いた。「次は、専修大学一年の黒田博子さんからの動画メッセージです……」

花火大会も半ばを過ぎて、大会本部の簡易テントの外に出た。天気が崩れるとの予報だったが、秋晴れの星月夜だった。

「三村君、おれもゆっくり花火を見させてもらってもいいかな？」

主催者だが、何もすることは無い。スクリーンやパソコンの操作は佳也子の後輩の三村君に頼りきりだし、花火のことは業者に一任だ。

「いいんじゃない」

佳也子言ってくれた。一人でテントを離れて、校庭の端にあるブランコに腰かけた。花火を見上げながら、自然とブランコを漕いでいた。

小学生の頃に、このブランコでガーコに泣かされた。後ろから勢いよく押されて、怖くなってもうやめてくれと頼んだが、ガーコは面白

がって、さらに背中を押してくる。おれはどうとう泣き出した。

打ち上げ花火

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子 ⑥0

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

いがってもらったお祖母ちゃんの葬儀に出席することはできなかった。親戚を入れても出席者は五人だけの寂しい見送りだった。感謝のメッセ

ジを込めた花火を打ち上げて、母親の初盆の哀悼としたい……。

だったら、自分で花火を打ち上げてやるさ、怒りにまかせて言ったのだが、いいじゃないと佳也子が賛同

してくれただ。母親が遺してくれた葬

が湧き上がる。地元のお祭りも中止になったので、開催日は秋分の日に決めた。

「法政大学の三年生、山本浩二郎さんからのメッセージです。おやじ、かあちゃん、ばあちゃん、元氣？ 今年

の夏休みはコロナで帰れなかったけど……」

小早川彩香の声がやさしく響いた。予算的に花火の数が少ないので、苦



「ごめんごめん、じゃけんど祥雄くん、そんなに弱虫じゃったら、だれもお嫁にきてくれんよ」

悔しくて、余計に涙が溢れてくる。目の前を影がよぎって、唇にやわらかなものが触れた。目の前にガークのそばかすだらけの笑顔があった。

「心配せんでもええよ。アタシがお嫁さんになってあげるけえ」

あのときのことを、佳也子は覚えているだろうか。

「水谷祥雄さんから、母親のタケさんへのメッセージです」

いよいよおれの番だ。

「お母さんの塩むすび、最高でした。お母さんの漬けた梅干し、やわらかくておしかったです。お母さんの糟汁、心まで暖まりました。お母さんがふかしてくれたサツマイモは、どんなお菓子よりも甘かった」

人影が近づいて来る。佳也子だった。無言で、隣のブランコに腰を降ろした。

(相変わらずおれは弱虫だ)
そばにいる彼女の存在に、動揺している自分がある。

「あなたは、強い人でした。病に倒れても、愚痴も言わないで、周囲への気遣いと感謝を忘れない人でした。寝たきりになっても、弱音をはかない人でした」

佳也子が小さく頷いた。

「本当に強い人だったよね」

心の中で否定した。いや、強くならなければならなかったんだ……。お互い一人っ子の長男長女で、それぞれの家から結婚を反対された。焦れたおれが婿に入ると言うと、母親は泣いて諫めた。

「お母さん、本当にありがとうございます」

巨大な火炎の花輪が、夜空を彩った。おれは合掌して、瞑目した。佳

也子も做ってくれた。

「水谷祥雄さんから、もう一つ、メッセージが届いています」

いよいよかと緊張した。このために、佳也子にも内緒で、10号玉六万円の花火を別料金で特注していたのだ。

「佳也子、いやガーク、今日はありがとう。ガークのおかげで、こんな立派な花火大会を開催することができた」

拍手が起こった。

「お互い、もう還暦だ。人生いろいろ、おれは奥さんに早くに先立たれて、おまえは酒癖の悪い婿さんに愛想を尽かして追い出した」

笑いが起こった。佳也子の視線を感じる。

「男もいろいろ、女もいろいろ、それで今は、お互いに独り暮らしだ。でも、人生はまだまだ長いぞ」

一呼吸おいた。

「おれと一緒に百歳まで生きよう。結婚してくれ！」

地響きがする発射音がして、ひと際大きな爆音がこだました。大輪の花火の中に、ハートマークが輝いている。

「勇気を振り絞って、佳也子のブランコに歩み寄り——」

まつの古本屋さん どろ書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
 - ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30 ~ 18:30

※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1回 2,000円 半年間 9,000円 1年間 15,000円 >



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「大河の一滴」

五木寛之 著 幻冬舎文庫

朝鮮に一家で入植し、命からがら逃げ戻って来た作者は、人生で二度、自殺を考えたことがあるという。そんな作者が経験を重ねてたどり着いた人生哲学。人間は露のようなちっぽけな存在だが、それが集まれば溪流となり川になり、やがて大河に合流する。そして、死して海に還る。ふたたび空にのぼり、雲となり露となり、雨となって、地上の旅が始まる。



「ブッダも親鸞も、究極のマイナス思考から出発したのだ」「人生は苦しみと絶望の連続である」、ネガティブな言葉が並ぶが、ホッとしている自分がある。倉田百三の「出家とその弟子」が詳しく解説されているのも嬉しい。

「ソバニールヨ」

喜多川泰 著 幻冬舎

町工場の一角を間借りして「研究所」なるものを始めて入り浸っている父親に、隼人はクラスメートから「変人の子ども」とからかわれる。それが原因で疎遠になっていた父親がアメリカに出張、隼人の元にガラクタを集めたようなロボットが残される。

勉強嫌いで、周囲からの視線ばかりを気にしている隼人が、ロボットのユージと交流すること



で変化していく。ユージは「キミにアイを伝えるために、生まれた」のだ。その「アイ」の真意が最後に明らかになる……。ソバニールヨの理論も説得力がある。ハートフルなファンタジーで楽しめたが、教育もAIに頼るのかと少々複雑（苦笑）。

「芸人の肖像」

小沢昭一 著 ちくま新書

萬歳、神楽、説教節、浪花節、落語、講釈、寄席の色物、モノ売り、流し、相撲、帮間、踊り子、ストリッパー、見世物小屋、猿回し……。作者が訪ね歩き撮影した昭和の芸人たちの姿。写真屋の長男として生まれた作者のファインダーは、芸人の内側まで覗いているようだ。

「落語国にはロクなヤツは住んでいませんが、正直に、のんびり生きている人間ばかり。（中略）



戦後の自由とか、平和とか、あるいは、まず人間を愛するという考え方の、下地を作ってくれたように思えるのです。」、軍国少年だった作者は落語に感謝する。ストリッパーのハダカ屋さんという呼びかけが温かい……。

どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣（店内専用通貨）であれば半額、現金であれば3割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

どろくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

廃線や昔に帰る晩夏光

近藤 昌平

難聴や聞き留めている蝉時雨

富久光

星月夜世に遺すもの何もなし

片岡 正人

鬼灯ほわすぎの数を比べる姉妹

隆愚

風鈴に江戸の話聞いてゐる

大槇 三代子

芸備線車窓人無く夏終わる

赤川 冬人

大空に五輪を描かきしブルーインパルス

松岡 初枝

若き日に見し姿と重ねて

投稿&寄稿

候のことば
ちようよう

「重陽の節句」

隆愚

陰陽説では、奇数は「陽」の数字とされます。中でも最大の「九」が重なる九月九日は最も重要な節句として祝われてきました。「菊の節句」とも呼ばれます。長寿を祈る日です。昔は旧暦で数えたので、ちようど菊

の盛りでしたが、新暦のこの時期は、菊には少し早いかもれません。

平安の時代、宮中では菊を飾って鑑賞したり、盃に菊の花びらを浮かべて酒を飲んだり、詩歌を詠みあつたりと雅に過ごしたといえます。また、「被綿(きせわた)」といつて、

前日に菊の花に綿をかぶせて露を吸わせる風習も行われ、その露で体を拭くと若返るともいわれました。

さらに昔には、収穫祭の意味合い

の濃い行事で、「栗の節句」と呼ばれ、栗ご飯などで祝い、感謝を捧げたともいわれています。

「芸備線」 赤川仁洋

鉄道の芸備線が危ないらしい。隣市の三次と島根の江津市を結ぶ三江線が二〇一八年に廃線になって、次は芸備線ではないかと噂されていた。それがどどん現実味を帯びている。国益第一の国鉄が民営化されたのだから、赤字の垂れ流しは許されない。ノスタルジーや感傷だけでは運営費は賄えない……。

妙薬は利用客を増やすことだが、

自分に限ってもここ数年はまったく乗車していない。広島に出るにも乗り換えをしなくてもいい高速バスを利用している。以前は米子―広島間の急行「ちどり」があったが乗車率の低下で廃止、負の連鎖だ。

広島に出るのにたまには芸備線を利用するとして、問題は反対方向である。以前に帰省したときに、岡山経由で帰京してみようと時刻表を調べたが、連絡が悪くて断念した。現在はさらに悪化している。落合始発の新見行きが6時41分、次便は13時38分、これでは利用客が少ないのも当たり前だ。庄原や三次方面の連絡を考慮したダイヤを組めないものか。伯備線も危ない。

庄原から落合、木次線に乗り換えて山陰方面ならどうか旅行できそうだ。一時間内外の待ち時間があるので、俳句の吟行とする。相棒は古いカメラ。年齢を重ねて我儘になったのか、ひとり旅が多くなった。デジタルカメラの登場で投げ売りされている年代物のカメラを、ネットオークションで買い集めた時期がある。白黒フィルムを入れて、撮れるかどうかテストする。ピンボケも、そのカメラの歴史であり個性だろう。コロナ禍での夢想である。



